

アマゾンとナイル

世界の大河と言えば、誰しもアマゾンとナイルの名がすらすらと口をついて出る。いずれも人類に貢献し、その長い距離が群を抜いているからだが、その反面透明度の濁り具合でも1、2を競っている。

南米大陸を流れるアマゾンは、世界中にタダできれいな酸素を輸出しているとブラジル人が口を揃えて自慢するように、その大河が育てたジャングルは人間界を潤してくれている。アマゾンは長い距離をゆったり流れて行く間に降雨と太陽、風、土砂などにより水質が徐々に変化し、養分豊富な水となる。本来土色だが、マナウス近くでは、つい船の舳先に身を乗り出して見たくなるほど不思議な現象、つまり白っぽい川の色と黒い川がいつまでも交り合わず、川面に2色の水が延々10 kmに亘って続く。それは、白い川のアルカリ性分や塩分、異なる水温がいつまでも融合しないからで、2色の長い水の流れは珍しい観光スポットにもなっている。同時にアマゾンは、人々に多くの恩恵を与えてくれる。栄養豊富な土壌を培養し、沿岸住民に豊富な魚介類や野菜、果物などを供給して生活を支えてくれる。

一方、アフリカ大地を流れるナイルは、白ナイルと青ナイルと呼ばれる2つの川がスーダンで合流してひとつの川となり、その水が沿岸の古代エジプト人に恩恵をもたらした人類の貴重な遺産を残した。

アマゾンで珍しい光景を見たことから、ナイルの合流点では白い川と青い川が合流するシーンが見られるとスーダンを訪れた時、意気込んで合流地点へ行ってみた。カラフルな「白色」と「青色」のナイル川をイメージして、首都ハルツーム郊外の岩場の「白ナイルと青ナイルの合流スポット」に辿り着き目の前に見たものは、何と二つの川がしぶきを上げて荒々しく交り合い一つになって流れ行く力強い大河の姿だった。そこには白も青もなかった。

なぜケニアのビクトリア湖から流れる川が白ナイルで、エチオピアのタナ湖から来る川が青ナイルと呼ばれたのかも分からないまま、2つの川が合流して一筋の無色透明のナイル川になったという事実だけが、ボーとした頭の中に刻み込まれた。